フランス留学体験記

ストラスブール大学(仏語交換留学)
パリ・ソルボンヌ大学(仏語私費留学)
パリ7区エリック･サティ音楽学校(音楽私費留学)

経済学部 2009 年卒　谷内　由布子

留学先　フランス
・前半:ストラスブール大学連合(学部交換留学)
・後半:
パリ・ソルボンヌ大学（仏語研修）
パリ市立7区エリック・サティ音楽学校(フルート)

動機
・フランス：かつて学んでいたフルートがきっかけ。本場のフランスで音楽を一度学んでみたかった、また卒業論文のテーマである「企業メセナ」についてのフィールドワークを実施するという目的もあった。

お金
・費用：渡航費20万円、学費1500ユーロ（私費留学分）、その他生活費など100万円程度
・レート：170円／ユーロ

欧州

■留学前

(1) 諸手続き

留学のために準備したものは、交換留学予定の大学へ提出する動機書（フランス語)、私費留学予定の大学への登録手続き、学生ビザの申請である。

学生ビザの申請には東京にあるフランス大使館へ出向く必要があったが、航空券を依頼した旅行代理店で、学生ビザの代理取得をお願いできるので、利用すると便利である。

(2) 私費留学先の選定

ホームページを閲覧し、資料を取り寄せるなどした。学費や授業内容について比較を行った上で決定した。授業時間数によっては学生ビザの申請が通らないことがあるので注意が必要である。

■出国

(1) 荷物

現地になんでもあるのは頭では分かっていたものの、不安から荷物が大量になってしまった。結局、20 キロのスーツケースとパソコンケース、旅行鞄を背負い、日本を発った。しかし、大変だったのは到着してからだった。フランスは、大きな駅であってもエスカレーターがないことがほとんどで、これらの荷物を一人で抱えて、階段を昇り降りする必要があったのだ。到着してすぐ、荷物を持って来過ぎてしまったと後悔した。

(2) 国の印象

最初に宿泊した街はパリだった。着いてすぐ感じたことは、思い描いていたイメージとまったく違う、ということだ。街路に溢れている煙草の吸殻やごみ、電車の中の落書きやドブのような匂いなど、とにかくショックを受けたのを覚えている。また、白人だけではなく、それ以上にいろいろな人種の方が往来していたことも、私にとっては驚きであった。

(3) ストラスブールへの移動

パリで 1 泊し、T.G.V.という新幹線のような高速鉄道に乗ってストラスブールに向かった。ストラスブールの駅では、現地大学のチューターと待ち合わせていた。この交換留学のプログラムは、旧 7 帝大とストラスブール大学連合間で実施されているものであったため、他の日本人学生とも、駅で顔を合わせることとなった。

■ストラスブールでの生活

(1) ストラスブールという町について

ストラスブールは、フランスとドイツの国境付近に位置し、人口は当時約 27 万人、フランスで 9 番目に人口の多い都市である。ドイツ色が強く、名物料理などもドイツ料理に近い印象であった。言語に関しても、フランス語に並びドイツ語を耳にするっかいが多かった。世界遺産に指定されている大聖堂が町の中心にあり、その姿は圧巻であった。田舎の温かい雰囲気があり、留学生も非常に多い町であった。

(2) 交換留学プログラムについて

私が参加したのは、旧 7 帝大とストラスブール大学連合菅野プログラムであった。参加者は各大学から 1〜2 人で、全員で 12 人が参加していた。現地大学のフランス人チューターは 3 人、現地大学院に通う日本人チューターが 1 人であった。

1 年の大まかなスケジュールは、前期に語学の授業、後期に大学の授業を受講することが予定されており、基本的には 1 年参加しなくてはならないプログラムである。

プログラム生であることの利点としては、大学寮に部屋を用意してもらえること、チューターが現地での手続き補助をしてくれること、旅行などのプログラムを組んでもらえることであった。

フランスでは、銀行口座を開くために、通常は滞在許可証が必要となるのだが、その発行には半年ほどの時間を要する。だが、プログラム生であるために優遇され、現地での銀行口座開設をすぐに行うことが可能である。また、旅行のプログラムとしては、フ

ランス東部のアルザス地方巡るツアー、レストランでアルザス料理を楽しむことができる機会や、ブルターニュ地方を旅行するなどというものであり、無料で参加することができるのだ。

(3) 授業

私はこのプログラムの前期のみ参加だったため、語学の授業だけを受講することとなった。はじめに、フランス語のテストを受けレベル毎にクラス分け、そして 2 週間の強化授業が実施された。平日は 9 時から 17 時まで授業があり、午前中は文法、午後は講義型の授業で、選択制であった。私は、数ある授業の中から、フランス文学、会話、アルザス地方について調査し発表するという授業を選択した。

授業はもちろん全てフランス語である。聞きなれない言語だけで生活するのはとても疲れるのだと、初めの 2 週間で痛感した。

その後は通常授業となり、週 17 時間の授業を受けることとなった。文法、会話、音声学、講義型の授業の主に 4 種類だ。文法に限っては、日本である程度勉強していたものの、フランス語での説明は、理解するのが難しかった。また、話す、聞く、ということに関しては、準備不足が祟り、簡単な会話でも全く理解ができなかった。

私の所属していたクラスは、生徒数が約 15 人で、日本、韓国、タイ、ロシア、スペイン、ルーマニア、ギリシャ、アメリカからの学生であった。

また、前期の期間中に、大学の授業を聴講することが可能であったため、私はフランス文学、マクロ経済学、経営学の授業を聴講した。

(4) 寮生活

私は、大学から徒歩 3 分くらいの大学寮に住んでいた。部屋は 1 人部屋だったが、キッチン、トイレ、シャワーは共同であった。寮内にはさまざまな国籍の留学生が住んでいた。コミュニケーションをとるのは難しかったが、キッチンで偶然居合わせた学生と話したり、寮内でパーティーが開かれることもあり、そういった機会を利用して積極的に関わるよう心がけた。

■ストラスブールからパリへの引っ越し

出国前より、ストラスブールからパリへ引っ越すことは決めていたので、留学開始直後からパリの家探しを始めた。方法としては、インターネット上での不動産のサイトに登録し、情報がもらえるようにしたり、パリの大学寮に問い合わせたり、パリの日本人団体の不動産広告を利用するなどである。パリの住宅事情は厳しく、いい物件（治安が良い地域で、比較的家賃が安い）を見つけるのは難しいと聞いていた。しかし、そもそも空いている物件が非常に少なく、それらの情報集めに苦労した。最終的には、空き物件を何件か見つけ、下見の予約を取り付け、12 月初旬にパリで実際に部屋の下見へ向かった。私は日本人留学生で、フランスに保証人がおらず、半年契約ということで、なかなか契約まで取り付けるのも困難だった。

引っ越しのためには諸手続きも必要で、大学寮の退寮手続き、郵便局での郵便物転送手続き、銀行の住所変更、住居保険の住所変更を行った。引っ越しの際の荷物の移動は、自分の手で運べないものについては、郵便局を利用し、荷物を郵送した。

■パリでの生活

(1) 大学での授業

日本で仮の入学手続きを済ませていたので、指定された日に学校へ本登録をしに行き、後日レベル分けのテストを受け、パリでは上級クラスとなった。クラスの人数は 25 人程度で、文法中心の授業が多かった。

学生は、中国人、スウェーデン人が最も多く、他はイギリス、スペイン、アメリカ、韓国から来ていた人達だった。ストラスブールとは違い、このクラスでは、同世代の学生が多かった。授業のスピードは、ストラスブールと比べ 2 倍ほどで進み、ついていくのが必至だった。文法の授業のほかには、日本人・韓国人向けの音声学の授業があり、発音をしっかりと学ぶことができた。また、講義型の選択授業があり、私はフランス芸術史、フランス近代芸術史、パリの地理学、という 3 つの授業を受講した。

ストラスブールでは基礎クラスで学んでいたが、パリで上級クラスとなったことで、周りに非常に刺激を受けた。モチベーションも高く、目的意識がはっきりとしている生徒ばかりで、フランスの大学に入ることを考えているような学生が多かった。

(2) 音楽学校

音楽学校は、パリに移ってから、情報収集を開始した。パリ市は 20 の区に分かれており、各区に公立の音楽学校があるため、そのいずれかに入学をしようと考えていたのだが、それぞれの学校に関する情報収集に苦労した。結局は住所を調べ、実際に音楽学校まで足を運んで、授業の内容や費用、年齢制限、先生、入学条件などを聞きに行った。結局、私は 7 区のエリック・サティ音楽学校に入学することを決めた。

初めに、レベルを測るために楽器を吹き、その後、直接先生と会話をし、レッスンを受ける目的を伝えた。私は、週 1 時間の個人レッスンを受講した。日本のレッスンと異なることは、何よりも音を大事にする、ということであった。テクニックではなく、耳を使い音に集中することが大事であり、そのためには呼吸やイメージの持ち方も大事になってくる。そんなことを何度も先生に指摘されながら、日本とは異なるベクトルでレッスンが受けられる喜びを感じていた。

音楽学校で受講するだけでなく、日本の先生の紹介で、プロを目指す人たちのレッスンを聴講させてもらう、ということもあった。

(3) 1 人暮らし

寮から 1 人暮らしになり、寮が恵まれていた環境だったと感じた。いろいろと不便はあったものの、寮費は安く、電気代やインターネット代費用も安く、また契約が不要であるし。共同スペースは掃除婦が掃除をするなどしてくれていたのだ。

まずは、1 人での生活を始めるために、電力会社との契約、インターネットの契約、滞在許可証の住所変更などが必要となったが、異国の地でこれらを行うのは、非常に骨の折れる作業だった。ストラスブールでは、手助けしてくれるチューターや、他のプログラム生もいたが、パリには知り合いがおらず、何があっても自分で解決する必要があった。

しかし、これらの経験が、フランス語の上達に大きく繋がり、何があっても余裕を持っていられるたくましさが身についた。

(4) 美術館・コンサート・オペラ

パリには何十個もの美術館が存在している。私は、暇を見つけてはいろいろな美術館に通った。

パリ市では、毎月第一日曜日は美術館を無料開放する。また、ほとんどの美術館では、学生や 26 歳以下の若者への割引サービスを行っていた。こういった機会を利用して、気軽に美術館へ足を運んでいた。

また、私はクラシック音楽が好きなので、コンサートも頻繁に聴きに行った。1 週間のコンサートや映画などのエンタテイメント情報が掲載されている「パリ・スコープ」という毎週水曜日に発行される冊子を購入し、自分の興味のあるものを見つけては、足を運んだ。最もよく行ったのは、教会内で行われる室内楽のコンサートだ。日本ではなかなか聴けない空間で、新鮮な体験であった。

オペラ座では、開演 30 分前になると売り出される、割引された当日券を購入するために、2 時間以上並び、チケットを手に入れていた。

■食生活

ストラスブールでも、パリでも、基本的に自炊をしていた。フランスは物価が高く、外食を続けるとお金が持たないし、1 回の食事量が、日本と比較し 2 倍程度だったので、毎日食べ続けるのは体に良くないのでは、と考えたからである。とはいっても、友人との食事の機会や、パーティーがあるときには積極的に参加した。コミュニケーションを取る場として、食事の場は非常に大切だと感じていた。

自炊生活で困ったことと言えば、日曜日にお店が開いていないことである。日本では、遅くまで、日曜日でもお店が開いていることが当たり前であったので、慣れるまでには苦労した。

フランスの学生食堂はというと、1 食 2.8 ユーロ程度で、サラダとメインディッシュ、主食、デザートを食べることができた。食堂によっておいしさの差はあるが、この値段でお腹を満たせるのはとてもうれしいことだった。

■フランスでの移動（旅行）について

留学中、バカンスの期間を利用し旅行に出かけた。

フランスでの移動では、carte12- 15ans という、12 歳から 25 歳まで専用の割引カードが非

常に便利である。これを持っていると、フランス交通局の乗り物を割引運賃で乗ることができる。1 年間有効で 49 ユーロでの購入だが、最大 60%の割引率であり、たとえばストラスブール-パリ間はカードを使うと片道 60 ユーロが 28 ユーロ程度で済むのだ。

また、ヨーロッパには格安航空会社が多く存在したため、旅行の際には、よく利用した。ユーロラインというヨーロッパの国々をつなぐ国際バスも便利であった。鉄道は一番費用がかかったので、フランス国外に出るときには利用することはなかった。

■フランスと日本の違い

私はフランスに行って初めて、日本の良さを実感した。日本では、ごみが道に落ちていることは少なく、街並みや公共交通機関もとてもきれいに整備がされている。また、お店での店員のタイ魚も、日本が非常に丁寧で几帳面であることを感じた。これまで当たり前だと感じていたことが、そうではないのだと体で理解した。

もちろんフランスの良さも感じた。フランス人は、自分や家族との時間をとても大切にする。彼らは、お金を使わなくとも生活を豊かにする方法を知っていた。また、几帳面な日本とは違い、融通が利くというのもフランスの良さだと感じた。表向きはダメなことであっても、理由があり頼み込めば OK が出ることもある。たとえば、私は引っ越しの際、7 キロまでの重量制限のある段ボール箱を購入し荷物を送ったのだが、実際は中身は 9 キロほどとなった。一旦は断られたが、引っ越しで荷物をたくさん送る必要があるから、とお願いすると、今回だけだよと見逃してもらうこともあった。

最も印象深いフランスの良さ、といえば、フランス人の素直さだ。悪く言えばわがままなのだが、感情をとてもストレートに伝えてくるのだ。愛想笑いや、店員だから、といった考えはなく、気分のいい時、悪い時はそのままに対応し、もちろん嬉しいことがあれば、顔をくしゃくしゃにして、声をあげて喜び、怒るときもいつも真剣であった。人間らしいその振る舞いに、非常に愛おしさを感じた。

■最後に

フランスへ留学して学んだことは、語学や生活に関することだけではなく、自分の人間の幅を広げるものだったと、今になって改めて感じる。自分の視野を広げ、異文化についても理解する素地を作ったのだと思うし、困難な状況にあっても余裕を持っていられる等、現在に生きていることは非常に多い。

現在私は、メーカーで働いているのだが、海外市場を見据えて業務を進めて行く必要があり、グローバルの波は凄い速さで日本に迫っている。こちらが海外に出向くだけではなく、社内では多様な国籍の方が働き、また海外からの訪問客もとても多いというのが現状だ。そんな中、多少なりとも海外の感覚を持ち合わせているということは、非常に自分にとっての強みとなっていると感じる。

語学としては、フランス語を使う機会は入社後数回で、当然ながら求められるのは専ら英

語だ。私は英語が苦手であるのだが、仕事において、英語を話す機会を多く与えられている。幸い、言語としてフランス語を学んだことで、日本語以外の文章の組み立て方が頭に入っている、また発音できる母音が多いため、英語で会話することには、さほど苦労はしていない。

学生時代には、とにかく自分の目指すもの、体験したいこと、学びたいことに一生懸命になるのが一番だと、今は自信を持って言える。良い会社に入ることがゴールではないし、グローバルが叫ばれているからといって必ずしも英語を学ぶ必要はない。自分の伸びしろを学生時代にどれだけ作るか、が最も大事だ。

私はこれからも、フランスでの留学経験を大切にし、学生時代に取り組んだように、勇気を持ってどんなことにも挑みたいと思う。